

太宰府の文化財 423

古代都市大宰府の防疫

集団発生する伝染病を「疫病」とい
い、科学が発達していなかった時代
には、日を追って、または場所を移し
ながら広がる病に対して、神や鬼、怨
霊が移動しながら次々に人に取りつ
く様を想像していました。『続日本
紀』などの記録によれば、古代の大宰
府でも天然痘と思われる疫病が何度
も流行し、その病は隣国新羅に派遣
された使節団が患したことや、大
宰府を経て平城京に広がっていた事
実などから、外国から持ち込まれる
観念が広がりました。中でも天平7
年(735)に大宰府から始まった天
然痘の流行は、天平9年(737)ま
での間に数度の流行を繰り返して、政
権の要人が亡くなるなど、国にとつ
て脅威となっていました。

古代都市であった大宰府では疫病
から都市を守るために、都市と外界
が接する要所や山岳で疫神を退ける
ために祭祀がおこなわれました。博
多湾と大宰府を結ぶ古代官道では御
笠川にほど近い福岡市高畑遺跡や大
野城市仲島遺跡で、疫神の顔を描い

たとされる「人面墨書土器」等が川に
流された状況で出土しました。この
付近は大宰府のすぐ北に置かれた
「久爾駅」があったとされています。
大宰府と鴻臚館をつなぐ古代官道
では、大宰府の「羅城」とされる大宰
府を取り囲む城壁(土塁)の推定位置
に近い大野城市九州大学筑紫地区遺
跡と本堂遺跡でも、疫神や鬼を描い
た「人面墨書土器」や首や足を折った
馬の土人形(土馬)などが出土してい
ます。馬は疫神を運ぶと思われるお
り、平城京でも壊して捨てられた土
馬の例があります。宝満山で出土し
た「蕃」の文字のある墨書土器は、疫
神である外国の「蕃神」を示す可能性
もあり、大宰府の羅城の最高峰でも
防疫の祭祀がおこなわれた可能性が
あります。また、残念ながらいつの時
代から祀られたのかは明確ではあり
ませんが、羅城の線上にある水城東
門跡には「塞ノ神」という境を守る小
祠があり、筑紫野市阿志岐山城のふ
もとには、かつて疫神を祀った荒船
神社が置かれています。阿志岐山城

は有明海側から大宰府に向かって宝
満川東岸をさかのぼった行き止まり
の位置にある要所です。
このように目に見えぬ疫神の進行
を古代都市大宰府の外や境界にあた

る要所で防ぐ方策が、大宰府の人々
によって立案され、広域で実行され
ていたことが垣間見えます。

文責 山村 信榮

